**曹洞宗大本山總持寺・ニコニコ法話　　　　　　　　　　　　　　　　　　令和7年1月**

迎春

**本山国際室主事　ゲッペルト昭元師**

「迎春」という言葉は、文字通り「春を迎える」という意味であり、年賀状など新年の挨拶として使われております。仏教由来の言葉ではありませんが、非常に深い意味を含んでおり、禅のみ教えにつながっていると思います。

新年の初詣には、多くの方が神社やお寺に参拝し、健康や金運、成功などを祈願されます。今年も、不幸に見舞われることなく、息災に暮らせるようにとお祈りされたと思います。しかし、「来る日も来る日も、平安な毎日が続くこと」を祈願しても、人生はその願いの通りにはいかないことがあります。

私たちの人生には、晴れの日もあれば、曇りの日もあります。雨の日、風の日があるように様々な問題も起きます。ときには、嵐や台風のように激しく揺さぶられることもあります。しかし、嵐が終われば、太陽がふたたび輝くように、だれもが穏やかな日を迎えることができるのです。

令和６年1月1日に発生した能登半島地震によって、多くの方が犠牲となられ、尊い命をなくされました。石川県北部ではすでに平成１９年３月の地震で大きな被害を受け、令和５年５月の地震、昨年の地震により再び甚大な災害に見舞われ、更に９月には豪雨による被害もありました。

お正月に発生した大地震から一年が経ちました。すこしずつ復興がすすんでおりますが、まだ修復されていない被害も多く、見るにつけ地震の恐怖がよみがえってきます。すべてが修復されるまでにはまだ何年もかかるでしょう。

日々復興に向けて立ち向かう方々に、新年の適切な言葉を見つけるのは難しいことです。普通に「新年あけましておめでとうございます」と言えるはずはありません。とはいえ、能登半島でも新しい年が始まり、必ず春がやってきます。

「春」という言葉にどこか喜びを感じるのは、春の「芽生え」の中に、新たな始まりと再生が思い浮かんでくるからです。

人生にどんな雨風があったとしても、毎年お正月には、私たち一人ひとりにとって新しい一年が始まり、新たな春を迎えることになります。

静かな新しい春を迎えるにあたって、能登半島の方々には、一日も早く、平穏な日常が訪れますことを祈念しながら、一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。